



木木

千葉県TEACCHプログラム研究会
2022年5月8日(日)第114号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部
事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557
ホームページ：<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

VUCAな時代のTEACCHプログラム研究会

千葉県TEACCHプログラム研究会

代表 堀子 榮

2020年度の小学校から順次実施の学習指導要領に示されている「予測が困難な時代」を、「OECD Education 2030」においては“VUCA”な時代と呼びます。VUCAとはVolatile、Uncertain、Complex、Ambiguousの頭文字をとった言葉であり、より「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代になることを意味します。波動的なコロナ禍、相次ぐ地震を始めとした天災、まさかのロシアによるウクライナ侵攻。今まさにVUCAな時代を生きていると感じざるを得ません。

私事、35年前のことを振り返ります。

「このエスカレーターは早いだろう。何故早いかというと大量の兵士を運ぶために造られたものなのだ。」「地下鉄は日本より深いところを通っているだろう。この地下鉄は核シェルターを兼ねているんだ。」シベリア抑留経験のある大先輩がソ連の自慢話をしてくれました。

「抑留者にソ連の人たちは優しく、黒パンやボルシチの差し入れをしてくれるんだ。それがおいしかった。」と楽しそうに話してくれました。一方、「エスカレーターはゆっくり起動させる技術の方が、技術的には高度であり、ソ連はまだまだなんだよね。」「地下は深い方が岩盤が堅く、堅い方が掘削は容易であり、逆に柔らかい方が水が出やすく難しいんだ。日本は地下の浅いところでも通しているんだ。」建設関係に詳しい大先輩がひっそりと話してくれました。ゴルバチョフ政権の時代。ソ連邦が崩壊前の頃に12日間のソ連邦のツアー旅行に参加した時のエピソードです。毎日が、新鮮な学びの連続でした。

1991年にソ連邦が各共和国に分離し、一番大きなロシアは、2022年再び時代の変わり目を迎えようとしています。しかし、隣国ウクライナの大きな犠牲を伴いながら。歴史上、戦争は多くの尊い命を奪うとともに、障害者を増やしてきました。ウクライナの障害者はどうなっているのでしょうか。大変な状況にあるであろうことは、毎日の画面から推測できます。胸が痛みます。「平和」という言葉がこれほど重い言葉であったことを、「平和」が崩れていっている状況を実感する中でひしひしと感ずります。何もできないつらさを感じます。

TEACCHプログラム研究会は障害がある人もない人も共に現実の社会の中で自分らしく夢を実現していくことを願い、また自閉症の方がより良い人生を送ることができるようにと願い、皆さんと共に今年も活動を続けていきたいと思っております。本年度は、3年ぶりに千葉県教育会館大ホールを使用しての総会を開催します。千葉県の福祉関係、教育関係の皆様方からの多大なるご支援・ご協力及び会員の皆様のお力添えによるものと心より感謝申し上げます。

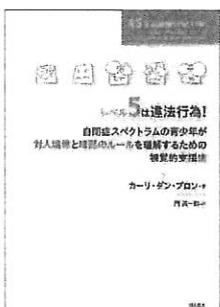
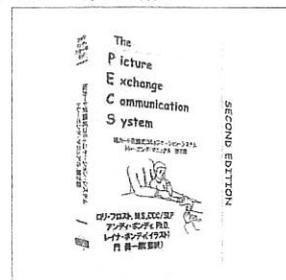
最後に、文部科学省より特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議において「特別支援教育に関する知見や経験は、教育全体の質の向上に寄与することから、学校教育関係者のマインドを改革し、特別支援教育に関わる教師を増やしていくことが、学校教育を変えていくための鍵となるといえる。」という報告が出されました。本研究会の果たす役割も益々大きくなるものと思っております。今後ともよろしく申し上げます。

今回のセミナー講師「門 眞一郎 先生」の関連著書御紹介



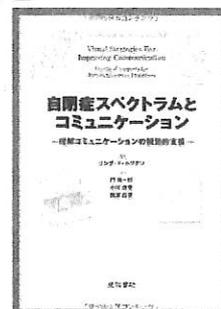
自閉症児と絵カードでコミュニケーション—PECSとAAC—第2版
アンディ・ボンディ、ロリ・フロスト他 2020

PECS® トレーニングマニュアル第2版
アンディ・ボンディ (Ph.D.) と
ロリ・フロスト (MS.CCC-SLP)
ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン (株)



レベル5は違法行為! 自閉症スペクトラムの青少年が対人境界と
暗黙のルールを理解するための視覚的支援法
カーリ・ダン・ブロン (著)、門 眞一郎 (翻訳) 2012

自閉症スペクトラムとコミュニケーション
—理解コミュニケーションの視覚的支援—
リンダ・A・ホジダン、門 眞一郎他 2012



ほか、多数、出版

令和4年度 TEACCHプログラム研究会 第2回連続セミナーのお知らせ

日 時：7月2日(土) 14:00~16:30 (13:30受付開始)

会 場：千葉県教育会館303会議室

演 題：「TEACCHにおける構造化」(仮題)

講 師：安倍 陽子 氏 (横浜市東部地域療育センター臨床心理士/公認心理師)

※元千葉県TEACCHプログラム研究会スーパーヴァイザー

配信期間：7月8日(金)~7月24日(日)

※次回講師、安倍 陽子 先生の御紹介

臨床心理士 安田生命社会事業団(現・明治安田こころの健康財団)子ども療育相談センター、横浜市
南部地域療育センターで、発達障害の子どもの評価、療育と家族の相談にあたる。現在は、横浜市
東部地域療育センター診療部心理士。1993~94年、朝日新聞厚生文化事業団の奨学金を得て、米
国ノース・カロライナ大学TEACCH部ウィルミントンTEACCHセンターにて研修を受ける。
~岩崎学術出版社より~

(編集後記) 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、令和2年度の千葉県TEACCHプログラム研究会のセ
ミナーは全て中止、令和3年度のセミナーは非同期型オンデマンド研修で実施してきました。この2年間の経験を
踏まえ、令和4年の今年度は、対面形式もしくはZoomによるオンライン形式の研修の実施とともに、昨年度同様
の非同期型オンデマンド研修を実施します。また、対面研修における受付時の三密防止やセミナー会場に來られる
方の人数確認、会計処理の明確化を踏まえて、セミナー申込み及び参加費について「Peatixサービス」を導入しま
した。新しい試みに対して、御協力いただきましたこと、感謝申し上げます。

今年度最初のセミナーは、門眞一郎先生の御講演です。数年ぶりにお話をうかがえること、とても嬉しく思いま
す。併せて、次回の講師は、本研究会の元スーパーヴァイザーの安倍陽子先生です。今後とも、素敵な講師を
お迎えして、自閉症のある方々への適切な支援ができるよう、皆様とともに勉強していきたいと考えます。(山中)

令和3年度 第6回連続セミナー 実践報告会

<実践発表 1>

「八千代キャラバン隊」の取り組みについて



八千代キャラバン隊
TRICK O HOLICK
様

「八千代キャラバン隊TRICK O HOLICK」さんは、平成22年度の2月に開催した本研究会第6回連続セミナー

実践報告会で、市川市手をつなぐ育成会の高橋氏、瀧島氏、平野氏が発表してくださいましたキャラバン隊「空」さんの活動に影響を受け、平成24年1月に発足されました。

音楽ダンス等を取り入れて、楽しんでもらいながら、障害のある子どもとの橋渡しをすることを目的に活動されています。障害のあるお子さんをもつ保護者5名でスタートした「八千代キャラバン隊TRICK O HOLICK」さんですが、現在メンバーは11名となっています。

実践報告では、「八千代キャラバン隊TRICK O HOLICK」さんが植草学園大学の学生さん方を対象に、発達障害のあるお子さん（今回は、龍馬君というお子さんを例にして）がどのように感じているのか、分かりやすく御講演されている動画を交えて、報告いただきました。

<どんなふうにかいているの・・・>

音の聞こえ方に、人それぞれ違いがあることをスーパーでの買い物時の音を例えて説明されました。その後、苦手な音を軽減するための「トリックタオル」や「イヤーマフ」等のグッズを紹介されました。そのほか、音の感じ方やいつどんな音が聞こえてくるのか分からないことへの恐怖、笛の音色や体育館での響く音、窓ガラスや黒板を爪でひかく音等、苦手な音の種類について具体的な説明をされました。

<言葉が分からない、伝わらない>

「言葉が分からない、伝わらない」という世界を会場の学生が体験できるよう、一人の学生が「ケロケロ王国」に迷い込んだという寸劇をされました。手袋の色が違うことに困っているカエルは学生に訴えるのですが、学生にとってカエルの言葉は「ケロケロ・・・」と聞こえるだけで意味が分からず、どう対応したらいいのか、困ってしまいます。まわりのケロケロ王国のカエルの手助けもあり、学生は困っていたカエルの手袋を正しい色の手袋に交換できた・・・という内容でした。

「一人一人のお子さんの『できること』『得意なこと』をしっかりと知っている人は、優しく見守ってくれる」「みんな違って、みんないい」「障害のあるお子さんが、何が言いたいのか、一人でも多くの人に知ってもらいたい」と話されたことが、印象的な実践報告でした。

<実践発表 2>

「コロナ禍における施設での支援の 取り組みについて」

社会福祉法人清郷会 日吉厚生園
松本 恵衣 氏



新型コロナウイルス感染症拡大防止に係る施設内での取り組みについて、実践発表していただきました。

令和2年2月27日の臨時休校要請や同年4月7日の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言、その後の感染拡大状況を受けて、日本中の誰もが大きな不安と戸惑いの中、日々、暮らしてきました。そんな不安と戸惑いが続くコロナ禍における、自閉症のある方々が生活する施設での取り組みの発表でした。

日吉厚生園は定員60名、契約者数64名、平均年齢37歳（最年少18歳、最高齢83歳）、平均の障害区分は4.6の生活介護事業です。

まず、日吉厚生園では、感染症対策委員会を立ち上げ、県の動向や嘱託医からの助言を踏まえ、対策を考えました。

その後、対策方針について利用者の御家族に協力依頼をして、施設運営を進めました。

具体的な対策は、「マスクの着用」「手洗いの促進」「手指消毒の徹底」「室内やバス内の換気」「作業や食事場面での配置の見直し」等でした。特に、登園前やバス乗車時の御家庭からの預かりには、十分な情報共有をされました。

日中活動や食事の場面においては、利用者の方の配置を見直しました。利用者の方が対面に座ることのないように、椅子をセッティングして物理的な環境を設定しました。

マスクの着用は、感覚過敏のある方や今までの習慣を変えることが難しい方にとってハードルの高いものです。必要最小限の場面での着用に限定し、個別活動時はしなくてもよいとして、一人一人に合わせた働きかけや着用の仕方を実践しました。また、マスクを着用する場面をめくり式の絵カードで視覚的に提示して、利用者の方に分かりやすくしました。

そのほか、個別のスケジュールカードを提示している利用者の方には、マスクを着用する「活動カード」には、マスクカードを添付して「いつ、マスクを着用するのか」を分かりやすく伝えました。

先が見えない、変化が大きい「新しい生活様式」に対して、自閉症のある方がいかに楽しく、いかに豊かに生活していくことができるのか、日々工夫されている素晴らしい実践報告でした。

<実践発表 3>

「特別支援学校における支援の 取り組みについて」

県立八日市場特別支援学校
三国 寛伸 氏



特別支援学校での作業学習場面における自閉症のある中学部の生徒さんへの具体的な支援について、実践発表をしていただきました。「作業学習」は、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校における教育課程である「各教科等を合わせた指導」の一つです（参考：特別支援学校学習指導要領）。

今回の実践報告では、中学部木工班の作業学習の具体的な支援について、動画や画像を交えて発表いただきました。

自閉症のある生徒さんにとって、活動する内容が分かりやすく、自分から取り組みやすい場を設定することが基本です。「道具の準備」や「学習の流れ」を示した写真カードや指示書を作成して、視覚的に提示しました。また、活動の流れ（導線）、工具や作製した部品の置き場所等については、一定の流れに沿って取り組むことができるようにしました。

ルーターで面取りした木材を置く盆には、木材を10本並べられるように設定し、10本の木材の面取りが終わると次の盆を置いて取り組むことができるようにしました。このことにより、活動終了時には盆の数を数えることで、面取りを何本行ったのか確認できるようになりました。

また、木くずを集める「集じん機」の使用時は、機械音が大きいため、イヤーマフを装着して聞こえる音量の調整を行いました。このことで、音に対する過敏さも軽減され、落ち着いて活動に取り組むことができました。

作業学習時間内の活動内容は、個別のスケジュールを提示して、活動する時間と休憩する時間を明確にしました。提示したスケジュールを理解して、活動と休憩の切り替えがスムーズになり、減り張りのある作業学習になりました。

併せて、ワークシステムを使って、「何を」「どのように」「どのくらいするのか」「終わったら何をするのか」を分かりやすく伝えるようにしました。このことにより、自立的に活動に取り組むことができるようになりました。

その他、道具の置き場所は、視覚的・物理的構造化をして、道具の取り出しや片付けがしやすいようにしました。職員が道具の管理をする上でも、分かりやすい設定となりました。

生徒さんが主体的に作業学習に取り組むことができるように、きめ細かく配慮された実践報告でした。